6 主題

学習目標
- 場面や登場人物の心情の変化を捉え、主たる人物の生き方、考え方を通して、主題を読み取ろう。
- 表現の特徴に注目して、場面の描かれ方を押さえよう。

要点のまとめ

●**主題**　主題とは？　作者がその文章全体を通して表現しようとしていること。

- 主たる人物の生き方、考え方を通して表現されることが多い。
- 表現の特徴に注目して、場面の描かれ方を押さえると、捉えやすくなる。

小説の主題の捉え方

1. 場面や出来事を押さえて登場人物のおかれている状況を理解する。
2. 登場人物の心情や心情の変化、人物像を捉える。
3. やま場（話が最も盛り上がるところ。クライマックス）に注目する。
   やま場では、主たる人物が、強く心を動かされていることが多い。
4. 主たる人物の生き方、考え方から、作者が伝えようとしていることをつかむ。

表現の特徴　注目点

- 文章の書き方
  文末表現→文体＝常体（引き締まった感じ）／敬体（丁寧な感じ）
  現在形（生き生きとした描写）／過去形（冷静な描写）
  一文の長さ→長い（落ち着いた印象）／短い（緊張感のある印象）
  多く使われている言葉→漢語／和語／カタカナ／会話文
  ※同じ事物でも、表現・表記の違いで印象はだいぶ異なる。
- 表現技法……比喩（直喩・隠喩・擬人法）／反復／対句／体言止め／倒置　など　表現技法↓64ページ
- 語りの視点…誰の視点で物語が描かれているか。
  物語の語り手になっている人物が主人公とは限らない。

確認問題

●○●　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「槙人（まきと）ー、ごはーん」

母さんに呼ばれる。あー、と答えてから立ち上がった。

食卓に並んでいるのは、いつも見るものばかりだ。肉豆腐、春巻、野菜サラダ、数の子、粕漬（かすづ）け、ごはん、大根と油揚げの味噌汁（みそしる）。かわりばえのしない風景。

食べはじめてから、梅干しのことを思い出し、俺はゆっくりと食事をするばあちゃんに聞いてみた。

「ばあちゃん、梅干しを夜に食べるなって、小さいときから言われてたの？」

ばあちゃんは少し間をおいてから言った。

「とーんでもない。おじいちゃんと結婚するまで聞いたこともなかったんだから」

(1)　心情理解　――線「俺は、えっ、と声をあげる」とありますが、「俺」はどのようなことに驚いているのですか。次の文の［　A　］・［　B　］に当てはまる言葉を文章中からそれぞれ抜き出しなさい。

▪［　A　］という言い伝えは、［　B　］の生まれ育った家のものではなかったということ。

A［　　］

B［　　］

ポイント　まず、「えっ、と声をあげる」がどのような心情を表しているのかを押さえる。そのうえで、槙人が何に対して「えっ、と声をあげ」たのかを、――線の前後から捉える。

大げさに首を横に振るばあちゃんの答えに、俺は、えっ、と声をあげる。いつだって梅干しについて言うのはばあちゃんなのだ。

「おじいちゃんのお父さんったら、そりゃあもううるさかったのよー。あれはするなー、とか、これはするなー、とか。ねえ」

話を振られたじいちゃんが、隣で、そうだなぁ、とのんびり同意する。

「でも、今、ばあちゃんが言うことのほうが多いのに」

俺の言葉の意味は、あんまり伝わらなかったみたいだ。フォローするみたいに、母さんが言う。

「結婚したらね、いろいろ混ざっていくし、影響しあうものなのよ。たとえばほら、今日のお味噌汁だって、最初はお父さん、飲んでもくれなかったのよ。味噌汁の具が二つ以上あるのはいやだから、って」

「そんなことあったかな」

「とぼけるんだから。ほんと、苦労させられっぱなしだったわ。今もだけどね」

母さんが小さく笑う。味噌汁については、初めて聞く話だった。

父さんと母さんが、最初は別々の家庭で育っていたのだと思うと、とても不思議な気がした。そんなのは当たり前のことなのに、今初めて知ったような気持ちになった。

父さんと母さんだけじゃない。じいちゃんとばあちゃんも、最初は違うところから来て、違う言い伝えを持ち寄って、それらを混ぜていったんだ。

本当はものすごいことなのかもしれない。

つまらないものだと感じていた、いつもの食卓の風景が、いきなり別のものみたいに見える。毎日当たり前に続いていくと思っていたけど、それだって、実際は当たり前じゃないんだ。

それぞれの言い伝えが、集まって、また別の形になっていく。

梅干しとうなぎを一緒に食べるなと言われていた速見の親は、言い伝えを残さないことを選んだのだろう。それでもいいんだ。残したって、残さなくたって。

〈加藤千恵「春へつづく」より〉

(2)　表現理解　この文章の表現と内容の説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　会話文をふんだんに使って、第三者の立場で家族の生活を描いている。

イ　口語的な言葉遣いで、槙人の目を通した何気ない日常を描いている。

ウ　比喩などの表現技法を使って、家族の食卓を生き生きと描いている。

エ　外来語を駆使して、変わりゆく家族のあり方を描いている。

□

ポイント　表現については、文章中の言葉遣い、表現技法、誰の目から見て書かれているか（視点）などに注目する。描かれている内容については、選択肢ごとに、文章中の内容と照らし合わせて確認する。

(3)　主題　この文章で中心的に描かれていることを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　かわりばえのしない食事にも、深い歴史があると知ることで、改めて感じるようになった毎日の食事の楽しさと喜び。

イ　毎日、つまらないと思えるような同じことの繰り返しの中で、長い間守られてきた日本の伝統的な家族像への興味と関心。

ウ　家族という当たり前の存在が、不思議な偶然を積み重ねてできた、かけがえのないものであることへの気づきと驚き。

エ　どこにでもある、ありふれた家だと思っていた自分の家族の特殊性を知り、改めて実感する家族へのいたわりと愛情。

□

ポイント　「中心的に描かれていること」とあるので、単なる正誤問題ではないことに注意する。食事の言い伝えについて、槙人の考え方が、この場面でどのように変化したのかを押さえる。また、その考え方の変化によって、槙人がどのような思いを抱いたのかもあわせて読み取り、この文章の主題を捉える。

演習問題

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

家につくころには、空が夕暮れの茜色になっていた。冬は終わったはずなのに、日が暮れると空気が寒々とする。夕闇の中で沈丁花の香りが、くっきりときわだっていた。

「フミくん、マーケットの袋、二つ、持てる？　わたしが一つ、持っていくから。」

ビニール袋を片手にかかえながら、母さんは空いているほうの手で玄関の鍵を開けようとしている。

「持ってやろうか。」

「だいじょうぶよ。」

鍵穴をさがす母さんの背中をながめ、文也は、深呼吸をした。

いまだ。いまこそいわなきゃ。夕暮れの気配にまぎれて、母さんの顔を見ずにいってしまわなきゃ。

「母さん……実はね……」

ゆっくりと切りだした。きのうから、いおういおうとしていた①あの話を。

「なに？」

「ぼく……」

だれにもないしょで、二月に奨学生試験を受けていたこと、それにパスして、きのう、イギリスでのホームステイ先が決まったこと、出発はこの秋だということ。文也は母さんから目をそらし、いっきにまくしたてた。

「あとは、保護者のハンコがいるだけなんだ。」

「……フミ……くん……」

母さんの手から鍵がポロリと落ちた。母さんの表情はサングラスにかくれて、はっきり読みとれないけれど、鍵を落としたことにも気がつかないほど、おどろいているんだ。

(1) 内容理解　——線①「あの話」とは、どのような話ですか。それが具体的にわかる一文を文章中から抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

ポイント　指示語の指し示す内容は、前の文章中に書かれていることが多いが、後に出てくることもある。まずはこれより前の文章を確認し、なければ後の部分を確かめる。

(2) 心情理解　——線②「文也の予想どおりの反応」について、次の各問いに答えなさい。

1　文也は母がどのように反応すると予想していましたか。それについてまとめた次の文の［　　］に当てはまる言葉を、文章中の言葉を使って、二十字以内で書きなさい。

▪文也の話を聞いて、［　　］と予想していた。

ポイント　文也が、話そうとしていたことを一気に話した場面に注目。まず、母の様子や行動を押さえる。次に、そのような母を文也がどう捉えているかを読み取る。

2　内容理解　母は、実際にはどのように対応しましたか。適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　本当の気持ちを隠して、文也に賛成するふりをした。
イ　落ち着いた様子で文也の思いを尊重し、受け入れた。
ウ　文也に裏切られたと感じ、そっけない態度をとった。
エ　文也を思いとどまらせるために、静かに説得を始めた。

［　　］

「だまっていてごめん。でも、ぼく、いかせてほしい。いきたいんだ。」

母さんはうすく口をあけたまま、声をださない。それは、②文也の予想どおりの反応だった。たいせつなヒナ鳥が、自分の腕から飛びたとうとしているんだ、取り乱さないはずはない。

いまに母さんは、狂ったように泣きだすだろう、マーケットの袋をあたりにほうりだして。

「フミくん……」

母さんが文也の目をじっと見つめている。あたりから、音が消えた。世界に、ふたりだけしかいないような気になった。

それから——。

「文也、あなたも大人になったのね。」

母さんは、夜に溶けるような静かな声で、そういった。とてもすがすがしく、ニッコリして。

「いってきなさい。いろんな勉強をして、もっと大きくなってらっしゃい。」

「……母さん……」

「知らない国でひとりで暮らすのはたいへんだろうけど、若いんだからすぐになれるわ。あなたの人生だもの、思ったとおりに進んでみなさい。」

「母さん……」

「母さんは、いつでも応援してるわ。」

文也は泣きたくなった。

やわらかい羽がほしかったのは、ほんとうは自分のほうだったんだ。

親鳥はヒナ鳥をだいじにしながらも、いつでも大空に舞えるよう、羽を広げていてくれた。

飛びたつ時を待っていたんだ。

「母さん、ぼくは、ぼくは……」

文也は両手にさげたマーケットの袋をほうりだし、小さな子どものように母さんに抱きつくと、あたりもはばからず、大きな声で泣きだした。

〈田村理江（たむらりえ）「また、あした」より〉

ポイント　文也の話を聞いたとき、母は鍵を落としたことにも気づかないほどおどろき、何も言えなかった。しかし、その後少しして話を始める。話し始めたときの母の言葉や、様子に注目して、母の対応を読み取る。

(3)　**表現理解**　□の部分の表現の効果について説明したものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　擬人法を使って、文也への愛情を母の立場から表現している。

イ　会話文を効果的に使って、文也の深い失望を表現している。

ウ　文也の視点から、隠喩を使って親子の関係を表現している。

エ　倒置で印象を深めて、文也の戸惑う気持ちを表現している。

ポイント　まず、この文章が誰の視点から描かれているかを確認する。次に、文章中に使われている表現技法を確認する。そのうえで、選択肢に書かれている内容について、文章中の内容と合っているかを確認する。

(4)　**主題**　この文章で中心的に描かれていることとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　お互いに愛情をもちながら、本心をさらけ出せないことで生じる、親子のすれ違いを描いている。

イ　子どもに対して過保護な親の危険性を示し、外の世界へ飛び立たせることの大切さを描いている。

ウ　子どもの自立の大切さを十分理解しているのに、心配で子離れができない母の葛藤（かっとう）を描いている。

エ　ある決意を通して、親子間の信頼を確認し、自立への一歩を踏み出した少年の姿を描いている。

ポイント　この文章のやま場を押さえ、そこで起きた出来事と主人公の心情の変化を読み取る。そこから、どのようなことが読み取れるのかを捉える。

実戦問題

◆◇◆ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈佐賀改〉

〔高校二年生のあたし（理穂）が、小学六年生のころのことを思い出している。〕

妙に白っぽい病室の真っ白なベッドに美咲は、横たわっていた。黄色い点滴の液が、チューブを伝い血管の中に落ちていく。十二歳の美咲は、茶パツのショートではなく、黒い長い髪をしていた。髪の黒さと唇の紅さが、顔の青白さを引き立て、ベッドの少女は周りの白さの中に今にも消えてしまいそうなほど、儚げだった。

腕には、注射の痕がいくつも、赤黒い不定形な文様を作っていた。

「師岡さん、早く、元気になってね……」

みんな待っているからとお見舞いの言葉を続けられなくて、友迫さんが泣き出した。

「師岡さん、かわいそう」

嫌な予感がした。ひどく落ち着かない気分だった。

こんなになって、痛いでしょと、友迫さんはしゃくり上げ、先生も少し涙ぐみながら、その頭をなで、美咲のお母さんは、

「ありがとう。優しいのね。でも、もう少しの辛抱なの。二学期からは、学校に通えるから仲よくしてやってね」

と、エプロンで目頭をぬぐった。あたしは黙っていた。①美咲は、目を閉じて動かない。指先だけが、シーツを握りこんでいた。

涙やら、思いやりの言葉やら、お見舞いの品やら、お礼の挨拶やらが、清潔な白い病室の中を行き来し、それが一段落し、わたしたちは辞することになった。

「理穂ちゃん」

急ぎ足で病室を出ようとした時、美咲は目を開け、弱々しい声であたしの名前を呼んだ。ちゃんづけで呼んだ。嫌な予感は確信に変わり、あたしは、②覚悟を決めた。

「もう少し……います」

そう、師岡さんを疲れさせないようにね。理穂ちゃん、あとでおばさんが、お家まで送って行くわ。師岡さん、さよなら。ほんとに、待っているからがんばってね。じゃ、そこまでお見送りします。いえ、もう、よろしいですよ。先生、出席日数のことで……。

頭の上や体の横を、言葉は漂い、消えていく。みんな出ていく。閉まる寸前のドアの向こうで、友迫さんが目を赤くして微笑み、手を振った。

最悪な展開だ。あたしは悟り、もう一度覚悟を決め、美咲のベッドまで大股で近づいた。美咲が起き上がる。

「理穂」

美咲は、あたしに構えるヒマを与えなかった。バシッと頬が鳴る。鋭い痛みが走る。よろめかないように、足を踏ん張るのが精一杯だった。

「よくも、こんな恥ずかしいこと、してくれたね」

息を荒くして、美咲がにらむ。点滴のチューブが揺れた。

「理穂、あんた、最低！」

「わかってる」

「わかってない」

「わかってる！」

わかっている。これは屈辱だ。美咲にとって、安易な同情ほど屈辱的なものは、ない。千羽鶴の束が、ベッドの下に滑り落ちる。

千羽鶴はいい。お見舞いの手紙も花束もいい。でも、③友迫さんの涙だけは、まずかった。自分が、かわいそうな少女にされてしまったことに、美咲は蒼白になって怒っている。怒りながら、耐えていた。

「何よ、なんで、あたしが泣かれなくちゃいけないのよ。あんなふうに……」

美咲の目から涙がこぼれた。噛みしめた唇から、うめきが漏れた。

悔しい、悔しい、ちくしょう。

他人に対し、かわいそうと泣くことに、人はもう少し慎重でなければならないのだろう。助力できるなら、救えるのなら、最後まで支え続ける覚悟があるのなら、泣けばいい。友迫さんの涙は、無責任だった。勝手に泣いて、かわいそうがって、自分の気持ちだけ浄化して、微笑んでサヨナラなんて、あまりに

無責任だ。無責任な覚悟のない優しさは、ただの憐れみにすぎない。あたしが美咲から学んだことだった。

憐れまれて、たまるもんか。

シーツの上で、美咲の涙がシミになる。

「わかってる」

あたしは、呟いた。あたしも美咲を侮辱した。優しい親友の役を拒否できなくて、のこのこついてきた。最低だ。わかっている。

スリッパの音がする。おばさんが帰ってきたのだ。あたしは、台の上の洗面器から、タオルをつかんだ。しっとり、濡れている。

「美咲、これ、きれい？」

「そうだけど、何を？」

美咲をベッドに押し倒す。顔にタオルをかぶせ、拭く。骨の手ごたえしかない肩を押さえ、力をこめて拭く。拭けば、少しは涙の跡が隠せるだろう。美咲の泣き顔を誰にも見せたくなかった。たとえ、親にでもだ。

タオルを放り投げ、ドアを開けたおばさんの横をすり抜けて、あたしは、曇り空の下を家まで走った。一度も、立ち止まらなかった。

〈あさのあつこ「ガールズ・ブルー」より〉

(1) ✪心情理解　――線①「美咲は、目を閉じて……握りこんでいた。」とありますが、このときの美咲についての説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　お見舞いに来ても優しい言葉一つ掛けない理穂に怒りを覚えているが、大人の手前それを我慢している。

イ　友迫さんの態度は自分への侮辱であるにもかかわらず、それに気づかない周囲の大人への怒りに震えている。

ウ　お見舞いに来てくれたことを申し訳なく思うとともに、弱々しい姿を見られるのを恥ずかしく思っている。

エ　無責任に憐れみをかけられることに対して悔しさを感じているが、それを表に出さずじっと耐えている。

(2) ✪心情理解　――線②「覚悟を決めた」とありますが、理穂はどのような覚悟を決めたのですか。簡潔に書きなさい。

(3) ✪内容理解　――線③「友迫さんの涙だけは、まずかった」とありますが、理穂は「友迫さんの涙」をどのようなものと捉えていますか。文章中の――線③より前から、五字で抜き出しなさい。

(4) ✪主題・表現理解　この文章の内容と表現についての説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　死を覚悟したからこそ大人びた考えを手に入れた美咲と、彼女のことを必死に理解しようとする理穂との心の交流が、色を多用した表現によって印象深く描かれている。

イ　人前では簡単に涙を見せない勝ち気な美咲と、そのような彼女の性格を知り尽くしている理穂の心の動きが、会話を中心とした臨場感ある表現によって描かれている。

ウ　傷つきやすい性格の美咲と、彼女の悲しみを理解しながらも、美咲の成長を思いあえて厳しく接する理穂の心の動きが、比喩を多用することで繊細に描かれている。

エ　病気で神経質になってしまい何気ない一言にも感情をあらわにする美咲と、彼女を立ち直らせようとする理穂との心の交流が、複数の視点から多面的に描かれている。

ポイント

(1)・(2)　この後で、理穂と二人きりになったときの美咲の言動に注目する。

(3)　「友迫さんの涙」がなぜ〝まずい〟のかを、これより前の文章中から読み取る。出来事を押さえ、美咲と理穂のそれぞれの心情を捉え、描かれている内容を読み取る。また、表現の特徴に着目して、物語の描かれ方をつかむ。